

エッセイ

聖ベルナルの夢あるいは三日月に乗る聖母

"De Maria Nunquam satis"

St. Bernard de Clairvaux (1090 ~1153)



MURILLO, Bartolome Esteban (1617-82)

La Inmaculata Concepcion de Aranjuez, Museo del Prado

精進場 健史

スペイン・ハプスブルク家の歴史は、1519年、神聖ローマ皇帝カール5世が、カルロス1世としてスペイン王の座についたときに始まる。後の世のオーストリア皇帝ルドルフ2世の、偏執的とも言い得る博物趣味を想起すれば、ハプスブルクの血には、美術作品に対する飽くなき情熱が止み難く蠢いていたらしいことを容易に推察できよう。スペインが、その後約1世紀半にもわたって、この特色ある瓜実様の風貌を持った一族に支配されたことは、後世のわれわれにとって、じつに幸運なことであつたに違いない。歴代のスペイン国王は、その血に促されて、何人もの優れた画家たちを擁することになったのだから。そのスペインの国力がもっとも高揚し、それに伴って蒐集される作品の数が飛躍的に多くなったのが、フェリペ2世の治世に入ってからである。即ち1571年、レパントの海戦において、オスマン・トルコ帝国を駆逐したフェリペ2世は、己がスペインを最強の国家としてヨーロッパに君臨させることに成功したのみならず、自らをカトリック世界の盟主として、自他ともに認めさせることとなった。それは、カルロス1世の時代からスペイン王室に仕えてきたティツィアーノの作品『スペインに救済される宗教』（マドリード、プラド美術館蔵）が雄弁に語っている。やや際物的ではあるが、スペインを擬人化した、槍と楯を持つ女性の誇らしげなポーズ、その逞しい腕の描き方が、高揚する国民感情を余すところなく伝えていると言い得る。その勝利によって政治的にも宗教的にも、当時のヨーロッパにおける支配権を確立したフェリペ2世は、いかなる人物であつたのか。それは、アンギソーラによる肖像画『フェリペ2世』（マドリード、プラド美術館蔵）にくわしい。これが国王の肖像か、と疑うような、質素な黒い衣服とマント。そして地味な黒い帽子を被っている。装飾的な要素といえば、カラーや袖口にのぞく白いレース飾りくらいなものだ。しかし、その表情には断固とした矜持と自信が感じられ、左手に持ったロザリオは堅固な宗教的信念を表し、どこまでも私心のない最高権力者の、剛健な実直さがにじみ出ている。その治世を思うとき、すぐれた肖像画というものが、これほどまでに権力者の内面を描き出し得るということに、驚愕の念を禁じえない。

ところで、私たちは、この生真面目なカトリック護教家の時代が、また熾烈を極めた異端審問の時代であつたことを想起しなければなるまい。スペインは、当時からその後の時代にわたり、もっとも異端排斥が盛んだったところで、後世の歴史家をして「敬虔にして過酷、清廉にして残忍」と言わしめた異端審問官トルケマダを生んだ国柄である。即ちフェルナンド2世の時代、異端審問所長官トルケマダは、その在任中、9万人を終身刑に処し、8千人を火刑台に送ったといわれる。かように容赦のない神と教会への忠誠心は、その後のフェリペ2世の世にも受け継がれた。無私の潔癖性が、ときに冷厳な酷薄さに結実する。そこには人間精神の持つ暗い陥穽があるのかも知れないが、この話題にはいまは立ち入らないことにしよう。



前置きがやや長くなったが、この宗教的不寛容の時代の象徴として私が取り上げるのは、無慈悲なまでに妥協を許さない、ある意味での精神の強靭さというものが美術作品のなかに具象化された例としての「無原罪の宿り」“Immaculata Conceptio” 図像である。「無原罪の宿り」とは、神の母（テオトコス）であるマリアが俗人と同じであっては都合がわるいという、神学上の必要から生まれたドグマであるが、聖母マリアがその母、聖ア

ソナの胎内に宿った瞬間から、神の特別の恩寵によりすべての原罪を免れている、とするカトリック特有の教義のことで、ありていに言えば、キリストが父母の交わりによってマリアの胎内に宿ったのではないのと同じように、マリアもまた無性交妊娠によって生まれたという内容を持つ。本来、カトリック信仰のなかでも、どちらかといえば異端視されてきた教えであったが、宗教改革の時代、聖母マリアの聖性を否定しようとするプロテスタント諸派と闘争するなかで、カトリック陣営におけるマリア信仰がますます尖鋭化され、聖母マリアを極端なまでに神格化する過程で、却ってクローズアップされてきた教義である。（但し、教皇庁による公認は、1854年、ピウス9世のときまで待たなければならなかったのだが）それだけにこの教義が、異端審問がもっとも苛烈であったスペインで発生し、擁護されてきたことは、決して故なきことではない。

さて、「無原罪の宿り」は、ルネサンス後期からバロック時代にかけて、多くの画家によって描かれた。その主題は、幼児キリストを抱いていない若き乙女として表現されるマリアが、威厳にみちた光背に包まれながら、三日月に乗って天空に屹立する。そのなかでただひとつを選べと言われたなら、私は躊躇なく、17世紀にスペイン王家に召抱えられた宮廷画家、ムリーリョによる作品「アランフェスの無原罪の宿り」（マドリード、プラド美術館）をあげるだろう。「アランフェスの」と付け加えられるのは、ムリーリョの筆による複数の同図像のなかで、この作品がアランフェス宮のサン・アントニオ聖堂のために描かれたものだからである。

やや細長い画面を使っていっばいに描くという空間的配慮が、無原罪受胎のマリアの存在感を際立たせる。背後に神秘的に輝く彩雲と、頭上を飾る後光、鋭く光る上弦の三日月の白いシルエットがマリアの絶対性を主張する「硬」の要素だとすれば、両手を合掌ではなく交差させて胸に置くしぐさ、切なげな眼差しで天をみあげる少女のような表情、大気の流れにふんわりと流されるガウン、聖母のアトリビュート（棕櫚、白百合、薔薇）を手にするプット（小僧天使）たちの愛らしさは、マリアの慈悲を示す「軟」の要素だろう。全体として優美で甘美な雰囲気の中に、硬軟両方のマリアの属性を描ききったものとして、特筆に価するものである。



ところで、12世紀、教皇オイゲネス3世のもと、第二次十字軍の立役者として活躍し、かつシトー派修道会の確立に功をなしたクレルヴォーの聖ベルナルは、また熱烈な聖母マリア崇拝者であったが、彼はこう語ったと言われる。即ち「マリアについて語りつくすということはない」と。まことに、キリスト教美術のなかにおいて、イエスとならんでもっともポピュラーな登場人物である聖母マリアは、またいっぽうで、もっとも謎にみちた登場人物であると言っても過言ではない。

なぜなら、よく知られているように、聖書のなかにおける聖母マリアに関する言及は、そう多くはないからである。たとえば、マリアの図像のなかでも最も多くの画家によって描かれ、また人々に親しまれてきた「受胎告知図」の場面は、共観福音書のなかではルカ伝にだけしか記述がない。「聖母被昇天」の図に至っては、聖書外典（初期キリスト教に関するテキストのうち、教会の組織的統一の過程で、新約聖書正典から排斥された文書類）に取材して、13世紀のジェノヴァ大司教ヤコブス・デ・ヴォラーギネがまとめあげた聖者伝『黄金伝説』に因っているという状況である。

「無原罪の宿り」図像の論拠となるテキストもまた、その性格上、きわめて思弁的な内容にならざるを得ない。それは、辛うじて『ヨハネ黙示録』第十二章に、つぎのように記されているのみである。「また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた」と。むろん、ここにはこの女が聖母マリアであるという明示はないが、続いてつぎのような記述が来る。即ち「女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である」…。ムリーリオの描いた「無原罪の宿り」には「十二の星の冠」はないけれども、例えばスルバランの手になる作品（シグエンサ大司教区美術館蔵）にはきちんと描きこまれている。

それにしても、「無原罪の宿り」の図像的起源が『ヨハネ黙示録』のこの部分の記述にあるのは確かだとして、いったい何故、この教義の絵画的表現の根拠となったのであろうか。どう考えても、そこに論理的な必然性はないように思える。

そもそも、母アンナがマリアを無原罪のうちに懐妊したという「観念」を視覚化して作品にするというのは、ルカ伝に具体的な情景記述がある「受胎告知図」などとはおのずと異なり、高度に象徴化された手法に頼らざるを得ないのは確かであろう。

さらに、この教義の成立と定着が、プロテスタントとの闘争をはじめ、カトリック教会権力の絶対化と擁護に依拠していたこと、それゆえ、聖母マリアの意義を極端にまで尖鋭化させざるを得なかった背景を考えると、「無原罪の宿り」の図像は、どうしても他を圧倒する偉大な力を持った存在でなくてはならない。共観福音書に登場する乏しく弱弱しいマリアのイメージだけでは、あまりに不足なのだ。そこで、「太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠を」かぶる、『ヨハネ黙示録』の女をモデルにしたということなのかも知れない。太陽を身にまとう姿といい、十二の星の冠といい、それが権力と栄光の寓意であることは容易に想像がつく。では、足下の三日月はどうか。古来、三日月とは異教の象徴にほかならず、即ちカトリックからみた異端の教えを踏みしだく意味を持ったものであると想像できるのである。

こうして顕現した、理屈で考えればどうしても無理のある設定と、その背後にある教会の頑ななまでの自己絶対化の指向。「無慈悲なまでに妥協を許さない精神の強靭さ」のあらわれ、と私が感想を持った所以である。

そして、以上のような厳しい神学的要請に基づくにも拘らず、ムリーリオの図像が、多くの「無原罪の宿り」図像のなかでひとときわ優美なのは、16世紀から17世紀のカトリック圏の宗教美術の多くが、宗教改革に対抗する意図から大衆教化のためのドラマ性を重視したからにはほかならないだろう。フランスの美術史家、エミール・マールはこう述べている。即ち「この燦然と輝く画像は、論争を超える高みに聖母を引き上げている。彼女は改革者たちの攻撃の手の及ばない領域に入ってしまったかのように思われ、永遠の理念のもつ崇高さを体現している」と。瑣末で晦渋な教義論争とは無縁な一般信徒にとっては、「論争を超える」視覚的感性的訴えのほうが何よりのインパクトとなるのだ。もっとも、難しい教理経論で教化し得ない一般信徒を納得させるために、却って高度に象徴的意味合いをもった「無原罪の宿り」図像が動員されるというのは、なんとも皮肉な話ではあるけれども。

それにしても、どこまでも清楚で甘美な形像のうちに、過酷な宗教的不寛容が内蔵され

ているというのも、考えれば考えるほど不思議である。ひとつの二律背反であるが、「無原罪の宿り」を観るとき、私はいつも、「トレドの鉄の処女（別名、慈悲の聖母）」のことを連想してしまうのだ。これは異端審問がもっともしょうけつを極めた時期、スペインのトレド宗教裁判所で使われた刑具で、聖母マリアを形づくって作られている。聖母が罪人をその腕に抱きしめると、自らの身体に埋め込まれた刃で刺し貫くという仕掛けが施されているものだ。「慈悲の聖母」という命名は、現代の感性からすれば無粋なブラック・ジョークに聞こえるが、異端として生きるよりはカトリック教徒として死を選ぶことこそが救済に繋がるとされた教義上の要請を考えると、これは大真面目になされた命名であったと考えても不思議ではない。

あるいは、峻烈を極める魔女審問の教科書『魔女への鉄鎚』の共著者のひとり、15世紀のケルン大学神学教授ヤーコブ・シュブレンガーが、熱烈な聖母崇拝者であったことなど。

そもそも、初期教父哲学の時代から、聖アウグスティヌス、聖トマスを経て、いわゆる魔女裁判がようやく終結をみる18世紀初頭まで、カトリック神学が女性の存在を不当に過小評価するいっぽう、聖母マリアには特権的な地位を与えてきたことの整合性を、どう理解すればよいのだろうか。神の母（テオトコス）として、マリアは無性性がその本質であった、という解釈もあるが、図像化された聖母マリア、なかんずく、そのもっとも優美な「無原罪の宿り」のマリアは、女性という本質を抜きにしては語れないものとして造形されている。言い過ぎかも知れないが、表向きは性愛を罪悪視したカトリック神学が、その代償として（自覚のないままに）穢れなき存在としての聖母マリアを（マグダラのマリアを別とすれば）ほとんど唯一の合法的な性象徴として祀り上げたということはないのだろうか。前出のクレルヴォーの聖ベルナルは、あるとき聖母子像の前で祈っていると、幼子キリストに授乳していた聖母の乳房から、一筋の母乳を発射され、口唇に受けたという。この図像も多くの画家によって描かれているが、見様によってはエロティックな内容を持つこの聖人の幻視が、抑圧された性衝動の発露ではないと言い切れる証拠もまた、どこにもないのである。



さて、二律背反といえ、**「無原罪の宿り」**には、もうひとつの二律背反が隠されているように思える。それは、聖母の足下の三日月に触発される想像である。

三日月が異教の象徴であることはすでにふれた。三日月を踏む聖母は、即ち異教に勝利するカトリック教会の絵画的宣言ということになる。しかし、聖母は本当に三日月を「踏んで」いるのだろうか。見方によっては、聖母は三日月を踏んでいるのではなく、じつは「乗って」いるのだという捉え方もできる。

たしかに、『ヨハネ黙示録』には「ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み」とある。しかし、三日月に「乗る」聖母の図像が、この黙示録の記述を隠れ蓑にして、じつは通常考えられていることとは全く別の思想を伝えようとしているものであったとしたら、どうだろう。

たびたびこのエッセイに名前を出している、クレルヴォーの聖ベルナルに注目したい。聖ベルナルは、聖母マリアから母乳を享受したという伝説を生むほどの聖母崇拝に篤い人物であったとともに、1128年にテンプル騎士団の会則を起章した人物でもあ

る。テンプル騎士団の創設者の一人は、その叔父アンドレ・ド・モンバールであった。



テンプル騎士団は、その正式名称をソロモン神殿騎士修道会といい、聖地エルサレムを巡礼するキリスト教徒を守護するための騎士団として、1118年に教皇庁によって正式に認可されている。団員は白地に赤い十字架を染め抜いたマントを身に付け、教皇に対する絶対忠誠を誓い、修道士であると同時に戦士でもあるという生活を、祈りと清貧と服従のなかにおくった。騎士団は次第に勢力をもつようになり、ヨーロッパの各地に壮大なゴシック大聖堂を建立した。ところが、1307年、フランス王フィリップ4世（俗にいうフィリップ端麗王）は、時の教皇クレメン5世に進言して、テンプル騎士団の大粛清をはかったのである。その理由は、テンプル騎士団が寄進などによって莫大な財産を蓄えるようになり、それに伴ってヨーロッパ各地で隠然たる影響力を持つ様になったことに、フィリップ4世が危機感を募らせたからだと言われている。厳しい取調べと拷問。騎士団からの脱退を表明しない団員は火刑台に消えるという大弾圧の末、やがてテンプル騎士団は1312年に壊滅せられ、その財産はカペー王朝が没収することになった。

弾圧の嵐が吹きすさぶさなか、囚われの騎士団員たちは、牢獄のなかで聖母マリアを讃える祈りを捧げ、騎士団の確立に貢献した聖ベルナルを、聖母マリア信仰の創始者として崇めたという。

以上が、正史に残るテンプル騎士団の姿である。もとより、多くを知られていない騎士団であり、いわば歴史の闇にもあたる。それだけに、じつは、テンプル騎士団には、今も昔もさまざまな俗説がついてまわっている。

その代表的なものが、じつはテンプル騎士団は、古代アレクサンドリアのグノーシス派キリスト教以来の地下水脈を伝える、異端的教義を信奉する団体であったのではないか、ということだ。実際、取調べのなかで彼らに帰せられた嫌疑は、テンプル騎士団はバフォメットと呼ばれる悪魔像を崇拜し、その儀式のなかでキリストの十字架像を足で踏みつけにした、イスラム教徒と通牒していた、というものだ。そればかりか、男色にふけったという汚名まで着せられている。もちろん、これらはフィリップ4世が彼らを無実の罪に陥れるために捏造した無根の噂であると考えるのが正史の立場であるが、しかしいっぽうで、十字軍の時代に、その遠征を通してイスラムの文化や学問がヨーロッパに流入したのは事実であるし、グノーシス派キリスト教は、必ずしもイエスの受難を重視したわけではない。



ここで気になるのが、これまでも何度か言及してきたクレルヴォーの聖ベルナルである。

聖ベルナルは、やはりアレクサンドリアのグノーシス派の流れをくむキリスト教異端、カトリックに対する神学的工作を進めた人物であった。その意味では、正統派のカトリックに反する諸知識に、非常に近い場所にいた人物である。

彼は厳格さと清貧の重要視、禁欲的姿勢を以って成る人物であり、その自らの理想を、中興したシトー修道会や会則を起草したテンプル騎士団のなかにも実現させようとした。

また、瞑想のなかに聖母マリアから授乳されたという神秘的経験に裏打ちされるように、その直接的な認識を重視する立場は、神の理性的論理的把握を目指す教会公認のスコラ哲学とは相容れない部分をもつ。

じつは、こうした厳格さ、清貧の重視、直接的な神認識という要素は、カタリ派にも通じるアレクサンドリアのグノーシス派キリスト教に起源を持つものなのである。

果たしてベルナルは、異端者に対する神学的説得を試みながらも、相手に自らの心象に近いものを見出したというところはなかったのだろうか。

あるいは、聖ベルナルが強力にすすめた第二次十字軍の遠征は、イスラム文化との大いなる接触をヨーロッパにもたらした。彼はある書簡のなかで、ゴシック聖堂の壮麗さや装飾について語りながら、即ち、修道士たちが聖書を読んだり神の掟について熟考するよりも、聖堂内のあまたの彫刻を眺めて日々を過ごしたりするほうにより多くの楽しみを覚えるような、そんな聖堂建築がもてはやされ、かつまた、そこに莫大な出費が強いられることを嘆いている。そんなベルナルにとって、一切の偶像崇拜的要素を廃したイスラムの様式が、崇敬の対象となったとしても不思議ではない。

ありていに言ってしまう。聖母マリア崇拜の創始者ともいわれるクレルヴォーの聖ベルナルは、カトリック教会の側に身を置きながら、心情として異端すれすれの場所にいたのではなかっただろうか。そして、「無原罪の宿り」の図像に描かれる聖母マリアは、正当神学の立場からは、三日月を踏む聖母、即ち異教に対する勝利の象徴であったかも知れないが、ベルナルにとっては、密かに、三日月に乗る聖母、すなわち異教にも依拠する存在であったのではないだろうか。

むろん、聖母は三日月に乗っているのであると、ベルナルが語ったという確証などどこにもない。が、どこまでも聖母を崇拜したベルナルの内面を思うとき、ひょっとして、「無原罪の宿り」図像に、こうした二律背反の意味づけが存在したのではないかと考えるのもおもしろい。

聖ベルナルが、壮麗なゴシック大聖堂の装飾を批判したことはすでに触れたけれども、ゴシック様式の大聖堂、たとえばランス、ノートルダム・ド・パリ、シャルトル、アミアンなどの彫刻群、即ち悪魔の形をしたガーゴイル、占星術や錬金術を意味するレリーフなどに、どこか異端の匂いをかぎつけることもそう難しいことではない。テンブル騎士団の財力は、少なからず12世紀ゴシック様式の大聖堂建立に貢献したが、聖ベルナルがゴシック装飾を非難したことの裏には、自らの心情に対する屈折した思いがあったのかも知れない。

【参考文献】

『聖母マリアの系譜』内藤道雄著 八坂書房 2000年4月17日

『聖母マリア <異端> から <女王> へ』竹下節子著 講談社選書メチエ137 1998年8月10日

『聖母マリア伝承』中丸明著 文芸春秋社 文春新書 1999年9月20日

『秘密結社の手帖』澁澤龍彦著 全集第6巻所収 河出書房新社

『ヨーロッパのキリスト教美術 12世紀から18世紀まで』（上・下）エミール・マール著
柳宗玄/荒木成子訳 岩波文庫

『中世美学史 パラの名前の歴史的・思想的背景』ウンベルト・エーコ著 谷口伊兵衛訳
而立書房 2001年12月25日

『黒い聖母崇拜の博物誌』イアン・ベッグ著 林睦子訳 三交社 1994年7月1日

『オカルトの図像学』フレッド・ゲティングス著 阿部秀典訳 青土社 1994年6月15日